

春の特別講演会 対談『故郷という異郷』～心の異邦人～



高井有一氏

3月21日、仙北市総合情報センターホールで仙北市角館町に縁のある作家、高井有一氏と塩野米松氏の2人による対談「故郷という異郷」が行われ、市民約45人が集まりました。

芥川賞作家で新潮社記念文学館の名誉館長でもある高井有一氏（東京生まれ）は、角館出身の作家田口掬汀を祖父に持ち、昭和20年に13歳で約半年間角館に疎開しました。

アウトドア作家、職人等の聞き書きの第一人者として活躍する塩野米松氏は、両親が角館に疎開中に生まれ、角館高校を卒業するまで角館で暮らしました。

二人の対談で高井氏は、「角館は母の死など良い印象がなかったが、祖父を小説に書いた頃から角館の印象が良くなってきた」と角館の想いを述べ、塩野氏は「作品を書くときに角館を思い浮かべ、また、方言もとても大切」と話していました。



塩野米松氏

記念講演会 田口掬汀と中央美術－明治青年のめざしたユートピア－

仙北市角館町文化財保護協会が主催する記念講演会が、4月7日、仙北市樺細工伝承館で開催され、市民など約60人が参加しました。

当日は小笠原史氏を講師に、田口掬汀と中央美術－明治青年のめざしたユートピア－という演題で記念講演が行われました。小笠原氏は、秋田市出身で平成17年1月から18年1月にかけて、秋田魁新報の土曜文化に「田口掬汀と中央美術」を連載。角館町出身の作家田口掬汀の生涯に光を当てたことが評価され、平成18年度秋田県芸術選奨を受賞されています。

小笠原氏は「田口掬汀という人がいろいろな事業に関わり、それぞれの事業の中で他人が考えつかないようなことに具体的に手を伸ばした人。前半は家庭小説、後半は美術出版や教育指導に分けることができ、常にいろいろな方向性を自分の中に持っていた人でないか。型にはまらず、バイタリティの持ち主であったのではないかと説明。引き続き、田口掬汀や平福百穂、佐藤義亮それぞれの生い立ちから、投書雑誌「新声」の編集、「中央美術」の創刊などのほか、美術界に大きな役割を果たすことになる中央美術展（中展）開始について、詳しく丁寧な説明がありました。



丁寧に説明する講師の小笠原氏

新たな農山村政策にあたって 知事との意見交換会



今後の農山村政策のあり方について、地域住民や関係者の生の声を聴き、今後の参考にしようと、3月23日、寺田知事が上桧木内地区や田沢地区、白岩地区の現地視察に訪れました。

上桧木内地区を視察後、瀧分校で地域住民と知事との意見交換会が行われました。

交換会では、活性化に向け取り組んでいる、白岩村おこしプロジェクトS代表の下田三千雄氏

から、白岩城址燈火祭の開催や山菜「ひでこ」の栽培、それを活用した商品開発の研究などの取り組みについて説明したほか、NPOたざわ村事務局長の浦山清悦氏からは、設立までの経緯や村民文化祭の開催、

市から委託された「地区空き家調査」の実施などについて、上桧木内集落会副会長の鈴木重憲氏からは、国道周辺の美化活動や公共施設の環境整備、伝統行事の継承、秋田内陸縦貫鉄道の存続運動などの取り組みについて説明がありました。

